

外国為替相場

つかむ!

外国為替相場 *Foreign Exchange Rate*

異なる通貨の交換比率。為替相場、為替レートとも言う。表示方法は自国通貨（邦貨）建てと外国通貨（外貨）建ての二通り。

わかる!

関連知識

先物取引の目的

「先物」と聞くと投機を連想しますが、先物取引の目的はそれだけではありません。為替相場の変動による損害を避ける（リスクヘッジ）ためにも使われます。

1 外国為替相場

輸出などで外貨を稼いだ場合、外貨のままでは国内での経済活動（給料の支払いなど）に供するのは困難です。そこで外国為替市場（8月号参照）で日本円と交換することになります。その時の交換比率（例えば1ドル=120円）が外国為替相場です。単に為替相場、為替レートとも言います。

2 表示方法

(1) 自国通貨建て（邦貨建て）

1ドル=120円のように、外国の通貨1単位を自国の通貨で表す方法。日本やアメリカなどが採用しています。

(2) 外国通貨建て（外貨建て）

1円=0.008ドルのように、自国の通貨1単位を外国の通貨で表す方法。イギリスやオーストラリアなどが採用。

3 種類

(1) インターバンク相場と対顧客相場

インターバンク市場（8月号参照）での相場がインターバンク相場、銀行と顧客（個人、企業等）との間の相場が対顧客相場。対顧客相場は電信売り相場等、数種類あります。

(2) 直物^{じきもの}相場と先物相場

即日（インターバンク取引では2営業日以内）決済される取引が直物取引で、その際の相場が直物取引。将来の特定の日（一定期間）に約束した価格、数量で外貨の売買を行う約束を現時点で行う取引を先物取引と言い、この場合使われる為替相場を先物相場と呼びます。

関連知識

ニクソン・ショック

1971年8月、ニクソン米大統領は、ドル防衛緊急対策としてドルの金兌換停止、10%の輸入課徴金賦課などの経済政策を発表。世界に衝撃を与えた。

4 固定相場制から変動相場制へ

戦後の国際経済は、アメリカドルと金を基軸とした固定相場制を取ってきました。(ブレトンウッズ体制、1ドル=360円) 各国政府は為替相場を平価(米ドルで表示された各国通貨の価値、IMF平価)の上下1%以内に維持することを義務付けられていました。しかし、日本や西ヨーロッパ諸国の経済発展によりアメリカ経済の地位が相対的に下落し、アメリカの国際収支は悪化、大量のドルが流出しました。各国はドルの信用低下からドル売り金買いに向かい、アメリカからの大規模な金の流出に発展。1971年、アメリカ政府はドルの金兌換停止を発表しました。(ニクソン・ショック) このため、ドル流出が加速し、各国は平価を維持することが困難になり、変動相場制に移行することになりました。その後、一時的に固定相場制(スミソニアン体制、1ドル=308円)に戻りましたが、1972年6月に、イギリスが変動相場制へ移行し、スミソニアン体制から離脱、1973年には主要国が変動相場制に移行しました。

5 相場の決定要因

基本的には外国為替市場での通貨の相対的な需給バランスによって決まります。例えば、円に対する需要が高まれば円高になります。この需給バランスには、経常収支の動向や金利差、インフレ率などの経済のファンダメンタルズや、通貨当局の介入、国際情勢の変化、市場参加者の心理や投機的売買などが影響を与えています。

みる!

資料
日本銀行調査統計局
「経済統計年報」

